

炭酸

光野 朝風

八畳一間の部屋の窓から見える吹雪は、遠方の山も、近所にあるはずの一軒家も掻き消していた。

轟々と響く音を聞きながら寝起きの瞳をこすり窓の外を何度も見るが、何も見えない。自分がポツリと部屋の中に置かれているような小ささを感じた。孤独が体の内側から染み出してきて感覚を奪っていく。景色のない世界で、自分が何をしているのか、昨日のことすらわからなくなりそうだった。

凍えるのが嫌で、灯油の残りを気にしながらストーブをつける。

年越し前の忙しい時期のはずが、携帯電話には一件の仕事のメールすらもない。

期間内のはずの、突然の契約破棄、解雇。仕事は日雇い、自転車式に繋いでいっているが、もうペダルをこぐ力もなくなって「生活」という自転車も倒れそうだ。

いつまで、こんなことを繰り返せばいいのだろう。自分の存在価値すらも見失いそうだった。途方にくれながらつけるテレビには、笑顔のアイドルやタレントがバカ騒ぎをして笑っていた。

。なかなかストーブに火がつかずに、体を縮こまらせてガタガタと震え、テレビの中の笑い声が、惨めな自分を笑っているように聞こえ、すぐさまテレビを消す。

携帯電話で掲示板サイトにアクセスする。

掲示板は暴力的で嘲笑的な言葉がいきかっている。

手を寒さで震わせ、掲示板を読みながら、仕事でバカにされてきたことを思い出す。

苛立ちを覚えながら、お腹がすいたので近くのコンビニまでご飯を買いにいこうと外に出た。

外は猛吹雪で、肌へ叩きつけるようだった。

途中、若い男が懸命に道行く人にティッシュを配っている。

「お願いします」

そう繰り返しながら、配っているティッシュを受け取る。

(何がお願いしますだ)

コンビニに入れば、外よりはあたたかい空気に包まれる。

お弁当のような高めのものは買えない。せいぜいおにぎりかパン。どれも食べ飽きた味だった。

。ちょうどお菓子のコーナーの前で、マフラーを巻き、似たようなジャンパーを着たカップルが手をつなぎながら幸せそうに話し合っていた。

女の声が耳に飛び込んでくる。

「ねえ、このチョコ一緒に食べようよ。冬季限定だよ」

(何が一緒に食べようだ)

サンタクロースみたいな女の白い帽子が気に入らない。

「チョコ本当に好きだな。一緒に食べたいの？」

「うん。一緒に食べたい！」

苛立ちは膨れ上がってくる。

女のことをいかにも「わかっている」というような優しげな男の笑顔が気に入らない。

「約束ね」

そう女が言って、男と指切りをする。

くだらないと思って、さっさとおにぎりとパンをレジにパサリと置く。腹立たしい気持ちだけが湧き上がってくる。理由すらもわからず、よからぬ感情がベトリと心にこびりつく。

「おにぎりあたためましょうか」と店員に聞かれ、「はい」とぶっきらぼうに答える。

先ほどのチョコを選んでいたカップルが手をつなぎながら吹雪の中へと消えていった。

しっかりと握られた手を見ると、特に女の方を背中から力いっぱい蹴り倒したい気分になった。

。「約束」は力のあるものが一方的に、かつ理不尽に結んでいき、都合のよい時に破るものだと感じていた。

約束はどこにもなかった。保障も、あろうはずがない。コンビニの外に出ると、どこにいるのかもわからなかった。ただ寒さと吹雪の中で頭痛だけがする。

少し先も見えはしない。

部屋に帰る途中、先ほどティッシュを配っていた男が、また「お願いします」と言ってティッシュを渡してきた。

きっと誰に配っているのかもわからないのだろう。道行く人間の顔はその男にとって、何の「意味」もなしていないのだろう。

部屋の近くにあるマンションに帰る母親と子供がいた。

小さな子供は赤い手袋をつけて、両頬に当てていた。

「それ気に入った？」と母親が聞くと、「うん。ありがとう」と子供は頬に当てながら答えた。プレゼントなんてどれくらいもらっていないのだろう。余計に孤独を感じた。

赤い手袋を当てた子供の顔を吹雪の中で見ていると、まるで顔に血がつけられているように見えた。

あの子供なら蹴り殺せるだろうと、ふと思った。

暴力的な衝動とともに、親に一度も認められなかったことを思い出した。周囲の仲間にもバカにされたことだけを思い出す。

部屋に帰ると、ストーブが消えていた。よく見ると、もう灯油がなかった。補充の灯油もない。灯油臭さだけが部屋に満ちていた。

おにぎりを口にすると、冷え切っていた。惨めさを感じた。

テレビをつけると、年末のイベントの中継がやっていた。明日から三日間、某場所で開催するそうだ。

つまらなくて、テレビを消す。楽しいのはテレビの中だけだ。

水を飲もうと台所で蛇口をひねると、洗わずに放置してあった包丁が目に入った。

包丁を手を持ち、その銀色のくすんだ鏡に映った自分の顔を見ると、誰かが自分をバカにしているような気がした。

すぐにそこから目をそらし、包丁を手を持ったまま、何十分も包丁の不気味な輝きを見つめていた。

掲示板サイトでしか騒げない連中のことを思い出し、携帯電話でアクセスした。そして書き込みをした。

「今速報が入りました」

ニュースキャスターの顔が一気に引き締まる。

「先ほど、T市某地区のイベント会場で、無差別殺傷事件が起こりました。現在確認されているだけでも死傷者は六名に及んでいます。殺人・傷害容疑で逮捕されたのは、二十八歳の無職の男で…」

ニュースを見ながら女の子の母親はすぐ近くで起こった凶行に驚く。

まさか自分が住んでいるすぐ側で、こんな事件が起こるなんて信じられなかった。

「怖いわね…本当に物騒になったわ…うちの子に何かないように気をつけないと」

そう言っている母親の側で、女の子が赤い手袋をつけて部屋中を駆け回っていた。

「お部屋の中で駆け回るのはおやめなさい」

母親が言うと、女の子は母親の元に駆け寄ってくる。

「あのね、ママ。電気が切れちゃってて熱帯魚みんな死んじゃったでしょ。だから、今度はもっといっぱい欲しいの。ね？そのほうがお魚さんも楽しいでしょう？」

女の子が言うと、母親は聞く。

「ハムちゃんはどうしたの？」

「ハムちゃんだけじゃ足りないよう」

「ハムスターもかわいいわよ」

女の子はぷっと頬を膨らませて「えーでもお魚さんもかわいいもん」と言う。

母親は呆れながら「今度はちゃんと飽きずに育てられるの？前もすぐに飽きちゃって死んじゃったでしょ」と子供の前でしゃがむと「今度はちゃんとするもん」と女の子は元気よく答える。

母親は女の子の頭を撫でながら「じゃあ、サンタさんをお願いしておくからね」と言うと、女の子は嬉しそうに「うん！いい子でいるから！」と目を輝かせながら言った。

炭酸

「鳥が飛んでいるんだよ。孤独な鳥が」

と彼女は言った。

「そっちも雨なんだね。一緒だと、なんだか嬉しい」

自分で言うならなんて陳腐な形容なんだろうと思うことも、彼女の口から出ると切に響いて静かに広がる。

天気が一緒ならどうして彼女は喜ぶのだろうと不思議な気持ちでいる自分には、女心を理解する機微すらもない。

電話口から聞き取れる彼女の声はいつも小さく、耳を澄ましていないと聞き取れないことがある。

窓から見える外の雨は音すらも聞こえない。

マンションの三十階から見える雨雲は、次々と目の前を通り過ぎる雨を落としている。

眼下に見える車も人も小さすぎて、まるで砂粒のようだった。

砂粒を掬い取るには、遠すぎる距離で、自分はただの傍観者だった。

彼女と話しながら冷蔵庫の中を見る。

ブルーベリージャムと、食パン二切れ、生卵六個、絹豆腐一丁、ベーコン三切れ、ビール六缶、牛乳一パック、無糖の炭酸四本、豚肉のバラ肉も残っていた。

ペットボトルの炭酸を取り出し、開ける。

炭酸が一気に抜ける音が一瞬して、はじける音が少しだけ聞こえてくる。

直接はできないキスを電話口ですると、彼女は泣き出した。泣いているとも、わからないほど小さな声で。でも、自分にはわかった。

人の声が聞こえないほどの高く静かな場所から、彼女の声を聞いている。

午後六時を過ぎて、外が薄暗くなり、ビルやマンションの明かりがつきはじめる。

街灯もその下を通る小さな人々を照らしている。家路へと急ぐ人々の波。

開けたままの炭酸に口をつけることもできず、少しずつ炭酸の泡が勢いを衰えさせ始めている。

。

眼下を通る知らない人たち。

ここから叫んでも、声すら届かないだろう。

炭酸がすべて抜けきったころ、彼女との電話は終わった。

部屋の電気すらもつけずに話していた自分は、街明かりにうっすらと照らされていた。

雨脚が遅くなっている。

味気のない炭酸をようやく片手に持ち、街の光の粒を眺める。

まるで街の雨を押し返しているようにも見えた。

「鳥なんて、見えないよ」

ふと漏れそうになった独り言を、必死の思いで飲み込んだ。

もう一度、冷蔵庫から炭酸を取り出して開け、今度はグラスに入れた。

飲むわけでもなく、ただ眺めるだけのために。

朝

動物たちが冬眠する冬でも、街は眠らず動き続けます。

それでも、朝日が昇る少し前、多くの人々が目覚める少し前、新聞を配達する人の目覚ましは鳴ります。

新聞配達員が、寝ぼけながら目をこすり、冬の朝の寒さに凍えながら着替え、白い息を吐きながら外を歩いて配達所まで行き、配達所のスタッフに元気よく挨拶をし、配達所から新聞を各家庭に配る頃、とある家庭のお母さんは一人起きだして野菜を切り、炊き上がったご飯をお弁当箱の中にもって、フライパンをコンロに乗せてガスをつけ、玉子を割り、フライパンの中で味付けをしながら、少しだけレトルト食品で手抜きをして、お弁当と朝ごはんの支度をします。

新聞配達員が、いつものルートを回る頃、少しだけ朝日が見えて一気に空が明るみだします。いつもの新聞配達ルートでは、晴れの日はおじいさんが早起きして冬でも庭でラジオ体操をしています。

新聞配達員はおじいさんに挨拶をします。

「おはようございます。新聞です」

新聞配達員のいつもの元気そうな顔を見るとおじいさんはにっこりと挨拶をします。

「いつもありがとう」

新聞配達員はおじいさんの「ありがとう」の言葉にいつも心が和みます。

配達員の新聞が残り少なくなった頃、お母さんのお弁当はみつつできあがって、朝ごはんのしたくも終わりました。

お母さんは子どもとお父さんを起こしに行きます。

子どもが口をあぐり開けて、布団を蹴飛ばして、パジャマから少しおなかを出して幸せそうな夢を見ているとき、お母さんは声をかけます。

「早く起きないと学校に遅れるよ」

お母さんはお父さんも起こしに行きます。

昨日の接待で飲み続けたせいで、部屋の中には少しお酒の臭いが残っています。

お父さんは布団を蹴飛ばして、パジャマから少しおなかを出して、口をあぐりあけています。まるで子どもを二人起こすみたいな気持ちになります。

「お父さん、朝ですよ。会社に遅刻しますよ」

小さな子どもと大きな子どもを起こさなければ遅刻してしまいます。

お母さんはお父さんの二日酔いを気遣って朝はコーヒーではなくホットミルクにほんの少々コーヒーを入れたコーヒー牛乳を作ってあげます。

ふやけた声で「おはよう」と目をこすりながら二人は起きてきます。

朝の支度をして、三人が開かれたカーテンからさんさんと降り注ぐ太陽の光を浴びながら、テーブルに並べられたお母さんの作ってくれた朝ごはんに「いただきます」を言う頃、ラジオ体操を終えたおじいさんは仏壇のおばあさんに水とご飯と少々の漬物を備えて手を合わせます。

「おはよう。今日も見守ってくれてありがとう」

そう心の中で自然と言いながら。

おじいさんが手を合わせ終えて、一人でご飯を食べようとしている頃、一人暮らしの大学生はようやく目覚ましでだるそうに起きだします。

昨日友だちと夜まで遅くはしゃいでいた大学生は、実家から送られてきた小包をそのままにして

おいていました。

月末でお金も少なく、食料がないから米を送ってくれと催促したら送ってきた小包です。きっとお米やらなにやら入っているのだろうと思って、朝ごはんの支度をしようと小包を開けてみると、お米や梅干のほかには手紙が添えてありました。手紙の中は少ない文字で、母のしっかりした文字で二行だけ書かれていました。

元気でいてくれることが一番の安心です。

疲れたらいつでも帰ってきていいからね。

いつも母親をそっけなく扱っていた大学生は、母親のあたたかい文字の柔らかさと、その言葉に思わず胸を詰まらせました。

「今日は、実家に電話でもしようかな」

大学生はそう呟いてカーテンを開けると眩しい光が部屋と大学生を包み込みます。

その頃、その大学生の両親は食卓でゆっくりとご飯を食べていました。

ワイシャツ姿でテレビを見ながらご飯を食べる大学生の父親は、目の前で静かにご飯を食べる母親をちらりと見て、テレビのほうを見直して聞きます。

「おい」

視線を向けずにご飯を食べる母親は「なんですか」と言います。

「送った米、ちゃんと届いたんだろうな」

母親は、ふわりと口元に笑みを浮かべてご飯茶碗を持った父親を見ます。

「大丈夫ですよ」

「そうか」

父親はテレビから目を離さずにご飯を食べ続けます。

それがシャイな父親の必死の照れ隠しだと思うと母親の心は朗らかになってきます。

父親がテレビを見ながら息子のことで内心安心しきっている頃、新聞配達員は仕事を終えて家路についていました。

配達員が家について一人でご飯を食べていると携帯が鳴り出してメールが届きました。

おはよう。

今度の土曜のデート、いいよ。

配達員はメールを見て飛び上がって喜びます。

配達員がメールで舞い上がっている頃、お母さんの作ってくれたお弁当を持ったお父さんと子どもは先に家を出ます。

「行ってきます」

背広を着てビシツとした、大学生の父親も、仕事に出かけます。

「いってくる」

玄関から光があふれ出て、人は朝を感じます。

お父さんは子どもの手を握って歩きます。

新聞配達のために、学費を免除されている新聞配達員は、余裕を持って学校へ行きます。

大学生はのんびりしすぎて、急いで玄関を出ます。

おじいさんは今年も山登りを続けるためにジョギングをしだします。

ジョギングの先々で自分よりも若い人がひいひい言いながら走っているのを見ます。

(山で足手まといには絶対にならない)

おじいさんは強く思いながら謙虚な気持ちで走り続けます。

道行くジョギング仲間に挨拶をします。

「おはようございます。いい朝ですね」

みんな微笑みながら挨拶を交わします。

大学生の母親は家事を済ませた後は、生け花と社交ダンスのサークルに行くスケジュールが入っています。

お弁当を持たせて、お父さんと子供を先に行かせたお母さんはデザイナーで、自分のお弁当を持って洋裁の仕事に出かけます。

ファッションショーまでに衣装をそろえなければなりません。

朝の街は忙しく動き始めます。

小さな夢も、努力も、微笑みも、朝の挨拶から始まります。

「おはようございます」

なんでもない挨拶が、毎日のあたたかみを運びます。

そのあたたかみの傍らで、植物たちは人を見守り生きています。

朝です。

朝の、光です。

あたたかい朝の、「おはようございます」